

335) ひっそり綴じて 00. 01. 26.

かすかに雪が舞っている 冷たい風の午後でした
北の国からお迎えが ^{しの あし} 忍び足してやってきて
姉はまだ見ぬ天国へ 神に召されて逝きました
^{さちうす} 幸薄かった生涯を ひっそり綴じて

白い着物に包まれて うっすら紅の唇に
僕の涙がこぼれても 笑みを浮かべて眠ってる
ただ美しく輝いて 冷たくなった姉でした
^{さちうす} 幸薄かった生涯を ひっそり綴じて

胸に組まれた両手には 真^かっ朱な花がありました
哀しかった人生を 恨むかのよな花でした
花の季節を待ちわびて 果たせなかつた^{いのち}生命です
^{さちうす} 幸薄かった生涯を ひっそり綴じて

この世の辛^{さだめ}い運命から ^と 解き放たれて姉は今
天国にいる父のそば 心静かな旅路です
^{とわ} 永遠に還らぬ姉だけど 僕の心に咲いています
^{さちうす} 幸薄かった生涯を ひっそり綴じて 咲いています